

## 11月4日 年間第31主日

申 6:2~6    ヘブ 7:23~28    マコ 12:28b~34

### 1. マコ

vv.30-31 「あなたの神である主を愛しなさい。…… 隣人を自分のように愛しなさい。」

新約聖書は私たちキリスト者に、漠然とではなくて明確に、父・子・聖霊なる神を「愛しなさい」と言っているのです。つまり“キリストによって世を御自分と和解させ、和解の福音を教会に委ねられた神”(II コリ 5:17-21)、“わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたキリスト”(ロマ 4:25)、“わたしたちが御国を受け継ぐことを保証してくださる聖霊”(エフェ 1:8-14)という三位一体の神を、私たちは愛しているのです。そのような教会共同体にとって、隣人を愛するとは、“御父と御子イエス・キリストとの交わりを愛する”(Iヨハ 1:3)ことに他なりません。

キリスト教はその世界観を、歴史上のある特定の出来事の上に置いて解釈します。すなわち神の子イエス・キリストの死と復活の事実が、更にそれに加えて“父と子から出て、父と子と共に礼拝される聖霊”に導かれて来た教会の存在が、過去から将来へと進み行く歴史を解釈する鍵であると信じています。教会はキリストの体であって、御子はその体である教会の頭としてすでに支配を始められたという“善き知らせ”が、そこでは宣べ伝えられているのです。“神である主を愛し、隣人を愛する”とは、教会憲章が“教会はキリストにおけるいわば秘跡”と述べていることの中身なのです。

しかし教会は、決して自分自身が目的ではないということを、ここで指摘しなければなりません。教会は信仰によって生きるのであって、現に見ているものによって生きるものではありません(ロマ 8:18-25)。神の国は教会に与えられた約束であって、“教会は神の国の完成を渴望し、栄光のうちに自分の王と結ばれることを全力をもって望み求めている”(教会憲章 5)のです。“神の国は近づいた”(1:15)という救済史の事実を理解せずに、神と隣人への愛を語る教会は、無意味な独り言を言う教会となってしまいます。

イエスは適切な答えをした律法学者に、「あなたは、神の国から遠くない」と言われました。ルカ 10:25では、この同じ物語りの冒頭でこの律法学者の口に マコ 10:17 の“永遠の命を受け継ぐには……”という言葉を入れていることが、たいへん示唆に富んでいます。

### 2. ヘブ

v.27 「というのは、このいけにえはただ一度(εφάπαξ)、御自身を献げることによって、成し遂げられたからです。」

このテキストは言うまでもなく、ヘブライ人への手紙全体の背景になっているのが、詩 110 編 であることを先ず指摘しておかなければなりません。“もろもろの天よりも高くされている大祭司キリスト”(v.26)は、詩 110 編 の“メルキゼデクのような祭司”であって、既にただ一度成し遂げられたいけにえによって、天

の聖所で“人々のために執り成しておられる”(v.25)のです。十字架上のいけにえが私たちの祭壇の上で行われるたびごとに、それは秘跡的に再現されて、信者一同はこれに与ります(教会憲章3、ミサ典礼書の総則/前文2)。

この大祭司イエスに向かって神は、「わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで、わたしの右に座っていなさい」と言われたというのが、詩110編のもう一つの主題なのです(1:13, 10:12-14 参照)。教会は、この“二度目に現れる日を待ち続けておられる主”(9:28, 10:13)との、“神のことは”を通しての中断なき対話の中でのみ真に存在し得るのであって、このことが忘れられるとそれは単なる人間的な、宗教的思想や道徳を維持して行くための、“あまりにも人間的な集まり”に過ぎなくなってしまいます。私たちはそのような悲劇を、過去に実際に見て来たのではなかったでしょうか。

### 3. 申

v.4 「聞け、イスラエルよ、我らの神、主は唯一の主である。」

かつてのイスラエルが日ごとに唱えていたこの章句(シエマー)において、“我らの神、主”とは、“あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神”(5:6)に他なりません。初代教会はこの神が、“その独り子をお与えになったほどに、世を愛された神”(ヨハ3:16)と同一の神であることを、発見したのでした。

「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。」(ヨハ4:10-11) 私たち教会は、ともにミサをささげる“兄弟の皆さん”と共に、「神である主、今おられ、かつておられ、やがて来られる方、全能者」(黙1:8)を、心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして愛しなさいと命じられているのです。

アーメン、ハレルヤ。

## 11月11日 年間第32主日

王上 17:10～16 ハブ 9:24～28 マコ 12:38～44

### 1. ハブ

v.28 「キリストも、多くの人の罪を負うためにただ一度身を献げられた後、二度目には、罪を負うためではなく、御自分を待望している人たちに、救いをもたらすために現れてくださるのです。」

私たちがキリスト者であるということ、教会が共にミサをささげる共同体であるということは、このキリストの再臨の日、神の国の到来の日、すなわち最後の完成の日に期待し、それに向かって歩んでいるということです。キリストは今や「ただ一度(天の)聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられた」(9:12) “勝利者” すなわち “王” であって、“ことばとしるし” によって支配しておられます。

ミサは、人間の “ことばとしるし” を通してキリスト御自身が働かれる “キリストの行為 – 神の民の行為” であって(ミサ典礼書の総則 1)、死者の復活と来世のいのちを待ち望む “神の国を受け継ぐ民” を育てます。ですから地上の教会は、それ自身が目的ではなくて、王であるキリストの到来を待ち望み、来るべき神の国の希望に生きているのだということを、決して忘れてはなりません。

### 2. マコ

先ず vv.38-40 を、ユダヤ教の律法学者という、現代の私たちとは全く無縁な昔の悪玉の話として理解してしまってはなりません。あるいはこれを、現代の教会の教導職や修道者に当てはめて、彼らを非難する口実に使うのも意味のないことです。そうではなくて、王であるキリストがこの聖書のテキストを使って、私たちに語っておられる言葉をこそ、聞かなければなりません。すなわち、“見せかけ” ではなくて、“多くの人の罪を負うためにただ一度身を献げられた” キリスト御自身が、“わたしに聞き従え”(イザ 55:2) と呼びかけておられるのです。

教会に救いがあるのではなくて、永遠の贖いを成し遂げて復活されたキリストに救いがあり、教会は “目に見えるものによらず、信仰によって歩んでいる”(II コリ 5:7) のです。キリストこそが諸民族の光であって、教会はその道具に過ぎません(教会憲章 1)。教会自身の活動とキリストの御業とを混同したり、教会を単なるこの世の活動団体の一つと考えるとき、そこにあるのは病める “見せかけの” 教会でしかありません。

次に vv.41-44 は、しばしば “敬虔な貧しい者” という手本のように理解されることがありますが、実際には教会には “すべて、生活費を全部” を献げる信者など存在しません。またこのテキストを、初代教会における献金奨励の説教の反映と考えるのも正しくないでしょう。私たちは、「神の御前で、そして、生きている者と死んだ者を裁くために来られるキリスト・イエスの御前で、その出現とその御国とを思いつつ」(II テモ 4:1)、王であるキリストがこの聖書のテキストを使って、私たちに語っておられる言葉をこそ、聞かなければなりません。すなわち、あなたの信仰は “全面的な” ものか、それとも “中途半端な” ものかが問われて

いるのです。「だれも、二人の主人に仕えることはできない」(マタ 6:24)とは、信仰の話であって、処世術についての教えではないからです。

### 3. 王上

v.16 「主がエリヤによって告げられた御言葉のとおり、壺の粉は尽きることなく、瓶の油もなくならなかった。」

信仰というものを、このような“めでたし、めでたし”で終わる人生のための道しるべだと、勝手に思い込んでいる傾向があって、……多くの“執り成しの祈り”や“共同祈願”がそうなのですが……、その反動として、自分の考えに好都合な結果が得られないと、“神はいない、信じられない”などと悩み始める信者が、潜在的にかなりいるように見受けられます。

「主は生きておられる」(17:1)という言葉で歴史の舞台に登場した預言者エリヤのために、サレプタのやもめを用いられた主なる神が、この物語りの主役であるという事実を、私たちは理解しなければなりません。実に救済史は、神の御業の歴史であって、文明史や人間の発達史ではないのです。主なる神は飢饉の中にある一人のやもめの都合で、たまたまこの奇跡を行われたものではありませんでした。

「あなたがたの救われたのは恵みによるのです。」(エフェ 2:5) 「このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。」(ガラ 6:14) 全世界の教会は“身を起こし、頭を上げて”(ルカ 21:28)、再臨のキリストを待っているのです(ロマ 8:23、フィリ 3:20)。

アーメン、ハレルヤ。

## 11月18日 年間第33主日

ダニ 12:1～3 ヘブ 10:11～18 マコ 13:24～32

### 1. マコ

v.26-27 「そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々を見る。そのとき、人の子は天使たちを遣わし、地の果てから天の果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める。」

近代のキリスト教の歴史においては、一部の狂信的なセクトを除いては、“キリストの再臨による救いの完成”という聖書の使信が真面目に取り上げられない傾向が顕著でありました。そしてその当然の結果が、西欧やアメリカにおける現代の社会の急速な“キリスト教離れ”、古い信者たちの“教会離れ”という現象になって現れたとすることが出来ます。目標がどこにあるのかを知らない信仰は、結局はやがて不要品として捨てられたり、何か別のもので代替される運命にあるからです。

しかし、もし私たちが新約聖書、特に福音書を真面目に読むなら、私たちがそこで聞くのは原始教会の説教であって、キリストの再臨と御国の完成の約束こそがその目標である(フィリ3:13-14,20-21)ということを知るのです。信仰年は、カトリック教会のすべての人々に、「カトリック教会のカテキズム」を通して“教会の信仰”を学ぶことを期待していますが、その“信仰”の目標がキリストの再臨と御国の完成であることに注目しましょう。「聖書が教会で読まれるとき、キリスト自身が語るのである」(教会憲章7)ということ、私たちは感謝しようではありませんか。

この原始教会の説教には、「その日、その時は、だれも知らない」(v.32)という面と、「あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、人の子が戸口に近づいていると悟りなさい」(v.29)という、緊張関係にある信仰の二面性が語られていて、決して筋の通った“予定のプログラム”を説明するようなものではありません。私たちが現代の世界に“時のしるし”を認めるとは、来たり給うキリストに向かって“身を起こし、頭を上げる”ことなのだ、ルカ 21:28 は説明しました。“教会の信仰”のこのような終末的性格を、信仰年を通して一人でも多くのカトリックの子等が学ぶことが出来ますように。

### 2. ヘブ

v.18 「罪と不法の赦しがある以上、罪を贖うための供え物は、もはや必要ではありません。」

キリストが“御自身の血によって、ただ一度永遠の贖いを成し遂げられた”(9:12)ということ、“私たちは信仰によって義とされた”(ロマ5:1)ということは、一方では既に成し遂げられた確かな事実ではありますが、他方同時にそれは過去のことではなくて現在の事実であることを、カトリック教会は“ミサ”と“ゆるしの秘跡”によって信者に体験させて来ました。ミサが御子の十字架のいけにえの“繰り返し”ではなくて“秘跡的再現”であるという総則の説明は、“ゆるしの秘跡”の理解にも通じるものです。

カトリック信者は、自覚的にこの“秘跡的再現”という理解を大切にしなければなりません。そうでないと、プロテスタント側からの論戦に負けるか、不毛の論争に陥ってしまいます。むしろカトリック信者は、プロテスタントが強く主張し続けて来た“信仰義認”の教理から、洗礼における“罪の赦しの確かさ”を学ぶ必要があります。洗礼の秘跡に与った人は、確かに、既に、罪の赦しの“消えない霊印”をしるされているのであって(カトリック教会のカテキズム 1272)、“ゆるしの秘跡”は決して洗礼における赦しの不完全性を補うためにあるものではありません。しかし実際には、多くのカトリック信者が洗礼における“罪の赦しの確かさ”に信頼することを知りませんでした。

「神の子を自分の手で改めて十字架につけ、侮辱する」(6:6)などということは、あり得ないことなのです。

### 3. ダニ

v.1 「しかし、その時には救われるであろう。お前の民、あの書に記された人々は。」

すべての人がその名を“命の書”(黙 3:5)に書き記されているわけではありません。しかし、入信の秘跡で白衣の授与を受けたカトリックの子等の“国籍は天にあり”(フィリ 3:20/フランシスコ会訳)、その日には「神が彼らの目から涙をことごとくぬぐわれる」(黙 7:9-17)ことを、私たちは信じてよいのです。“教会の信仰”は、“罪のゆるしをもたらす唯一の洗礼を認め、死者の復活と来世のいのちを待ち望む”信仰だからです。

「救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と、小羊とのものである。」(黙 7:10)

アーメン、ハレルヤ。

## 11月25日 王であるキリスト

ダニ 7:13~14 黙 1:5~8 ヨハ 18:33~37

### 1. ヨハ

v.33 「(ピラトはイエスに) “お前がユダヤ人の王なのか” と言った。」

v.36 「イエスはお答えになった。 “わたしの国は、この世には属していない。”」

ユダヤ人は、「あなたの神は王となられた」(イザ 52:7)という良い知らせをもたらすメシアの来臨を待ち望む民でありました。ピラトは、このイスラエルの信仰を理解していたわけではありませんが、その政治的側面に関しては、立場上警戒していたに違いありません。一方ではそれが全く見当外れであったことを、しかも他方では、今や復活して神の右に上げられたイエスが天と地の一切の王となられたことを、初代教会は福音書の受難物語りを通して宣教しようとしていました。

神はキリストを王として、「今の世ばかりでなく、来るべき世にも唱えられるあらゆる名の上に置かれた」(エフェ 1:21、フィリ 2:9-11)という原始教会の信仰告白定式が、「イエス・キリストは主である」(ΚΥΡΙΟΣ ΙΗΣΟΥΣ ΧΡΙΣΤΟΣ)であります。しかし、それは人間の支持率の多寡によってではなくて(ヨハ 6:15)、神の計画によることでありました(使 2:23,36)。

歴史の教会は、確かにその委ねられた遺産である聖伝と聖書を通して、キリストが王となられたことを信仰宣言して来ました。それに反して、この世界はこの劇的事件を知らない。この世界の中では、それが隠されている。しかし……、実際に私たちが経験して来た教会で、キリストが王となられたということ、それゆえに「主は来られる。地を裁くために来られる」(詩 96:13)ということが、教導職による説教の主題となることは非常に稀でありました。

そのような有様の中で、今年も教会は典礼暦の“王であるキリストの祭日”を迎えています。キリストが「主の主、王の王」(黙 19:16)として来られる御国の完成の日は近づいているのです(ロマ 13:11)。

### 2. 黙

v.6 「わたしたちを王とし、御自身の父である神に仕える祭司としてくださった……」

この記述は教会を、出 19:6 の「あなたたちは、わたしにとって、祭司の王国、聖なる国民となる」の実現として理解しているのであって、あなたたちは王であるキリストと共に「王座に座って」(ルカ 22:30)治めることになるという意味なのです(黙 5:10 も同じ)。しかしこの理解は現代人にとっては正しく捉えることが難しいので、聖書翻訳者が苦勞して来ました。フランシスコ会訳の聖書も、以前は“王”と訳していましたが、2011年の合本出版に際して“王国”に変更しています。

教会が“祭司の王国”であるのなら、信者一人一人は“キリストが王となられた”ということ、本当に知っていなければならないはず。既に王として「今おられ、かつておられ」(v.8)、さらに「勝利の上に更

に勝利を得ようと」(6:2)して「やがて来られる方」(v.8)「主の主、王の王」を、信者が聖伝と聖書から学ぶために「眠りから覚めるべき時」(ロマ 13:11)が、今“信仰年”という名でカトリック教会に訪れているのです。信者一人一人が“福音を宣べ伝える”ということは、先ず自らが“キリストが王となられた”という福音を知り、理解することなしには、不可能だからです。

### 3. ダニ

「“人の子”のような者」、「日の老いたる者」という日本語に翻訳された言葉は、もともとが黙示文学的表現でありますから、無理な解釈をしない方がよいのであって、むしろ単純に“イエス・キリストが、父なる神から王権を受けた”という意味に受け取るのがよいでしょう。原始教会は、復活のイエスの「わたしは天と地の一切の権能を授かっている」(マタ 28:18)という言葉で、ダニ 7:13-14 の実現として理解しました。そしてそのことが、すべての民へと教会が福音を宣教する理由となったのでありました(マタ 28:19-20)。

キリストの体である教会は、この王権をキリストと共に受けていることを、キリストの福音を宣教することによって証しします(7:27)。“この世には属していない”(ヨハ 18:36)神の国を待ち望んで(フィリ 3:20)、私達も声を合わせることが出来ますように。「アーメン、主イエスよ、来てください。」(黙 22:20)

ハレルヤ、ハレルヤ。